

校長室だより

共学共高

第
5
号

令和3年6月19日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

「生徒間の対話のある授業」part2

梅雨の合間の晴れた日に、W先生の2年生選択世界史Bの授業にお邪魔した。

歴史科目と聞くと、年代や出来事を暗記しなくてはならないというイメージを伴うが、日頃私が校内を巡回しているときから、W先生の授業は、そうしたイメージがまったくない。

授業のテーマは、「(中世における)商業の発展と都市の自治」であり、2時間続きの授業であった。私は2時間目から参観した。地中海商業圏と北海・バルト海商業圏の成立と内陸商業圏との関係について、授業が進められていく。

イタリアの海港中心都市である、ヴェネツィア、ジェノバなどでは香辛料が取り扱われていた。先生が「香辛料からイメージするものを挙げてください。」と投げかける。生徒たちは、固定されたペアと話し合いをしながらイメージを出していく。先生「どんなものが出ましたか？」生徒たちは自発的に発言していく。複数の生徒たちから「トウガラシ、バニラ、クミン、シナモン・・・」などが出てくる。先生「世界史のテスト的には、『胡椒』が答えになりますが、後々にいま挙げてくれたものが食卓に並ぶようになります。当時は、胡椒は『黒いダイヤモンド』と言われるくらい、高価な値段で取引されたのです。」

先生「みなさんが全財産を使っても手に入れたいとき・ものは何ですか？」生徒「自分が死ぬとき」「死ぬかもしれないとき」・・・先生「不治の病と言われたときに、これを手に入れば助かるかもと言われたら？自分の子供が死ぬかもしれないときに胡椒が効く、万能薬だと言われたら・・・」「そう、香辛料は香薬ともいわれるように、薬としても効能があると考えられたから高価だったのですね。」

先生「スパイスを使っている国は？」生徒「インド、インドネシア・・・」先生「そうですね。そうした国々はヨーロッパから見ると東側にありますから、『東方貿易』と呼ばれたのですね。」

ホワイトボード上に、ヨーロッパの地図が映し出され、内陸中心都市である、ミラノやフィレンツェの位置に先生が印をつける。先生「ミラノは『ロンバルディア同盟』を結成しましたが、同盟とあるからには、敵対する相手がいるから同盟を結ぶ必要があったわけですね。毛織物や金融で栄えた、お金を生み出すミラノを手に入れたかったのは？」「そう、神聖ローマ帝国ですね。」そこに対抗するために同盟を結成したのだ、と私にも合点が行く。

続いて、北海・バルト海商業圏の話題に移る。ロンドンから羊毛が輸出され、アントウェ

ルペンなどのフランドル地方で毛織物業が営まれたこと、北ドイツのリューベックなどでは海産物・木材・穀物などの生活必需品を扱ったこと、そしてこの商業圏を守るために、ノルマン系国家に対応して『ハンザ同盟』が結成されたことを学んでいく。

再び、ホワイトボード上にヨーロッパの地図が映し出される。北側にある「北海・バルト海商業圏」と南側にある「地中海商業圏」との間で交易が行われると、地図上の中間地点に位置する、フランスのシャンパーニュやドイツのアウクスブルグが栄えていく。このように、商業が復活・活発化したことによって、各都市が経済的に反映していくこと、人々が都市の自治を獲得していく話題へと推移していく。そうして、コムーネに代表される自治を獲得した「自治都市」と、皇帝・国王の傘下に入った「帝国都市」について学んだ。

授業の終盤になると、ギルドの発達を扱う。これは、生産販売の相互扶助を目的とするものである。先生からの問いは、「今、仮に自分の作った靴下が、競合相手よりもより売れるようにするためにはどうしますか？」生徒たちは、再びペアで意見交換する。生徒たちから出された意見は、「価格を安くする、デザインをよくする、品質をよくする・・・」などであった。先生が「ポイントカードをつくるといったことも考えられますね。要は企業努力です。競争があるから努力することになる。これは、助け合い、扶助の精神からは受け入れられないこととなります。」そうすると、「どこへ行っても同じ価格、同じ品質の商品にすることによって、共倒れを防ぐことになるのです。」

結びに、中世西ヨーロッパ世界において、11世紀を転換点として4世紀から14世紀までの間に、「封建（王権）」「都市」「教会」がどのように推移していったのか、を俯瞰する投げかけがあった。例えば、世界に一人しかいない教皇がシスマ（ラテン語で分裂の意）の時代には3人となり、教会が大分裂し、その権威が落ちていく。相対的に王権が強くなっていく、というように。

W先生の授業には、根拠や因果関係が示されて、理系の私にも論理的に理解できる点が魅力的だ。歴史は、単に出来事や事象の羅列ではなく、その時代の人、土地、文化、制度、考え方などが互いに関連し合って刻まれていくものだと思う。また、ひとくくりの時代を俯瞰して把握することも大切だろう。授業時間の経つのがあっという間に感じられた。生徒たちの集中力も高く、対話への取組もよかった。授業後に一人の生徒に感想を聞いてみた。彼女は、「情報量が多くて大変な面もあるが、とてもおもしろい。」と答えてくれた。

授業後に、W先生とお話をした。「『歴史は物語である』ということを中心に授業をしています。」と話されていた。また、今後、より歴史的思考力をはぐくむための質の高い問いを継続的に立てていく大切さについても共有した。私も高校生の時に、W先生に教わっていたら、とってしまう。私の高校時代の世界史の思い出といえば、授業中に隣に座っていたKくんが、私のノートに落書きをしてきたので応酬したら、授業担当の先生に見つか

り、叱責されたことである。Kくんはその後、博士となり研究職へ。現在は海外勤務である。
私は、都立高校の物理教師へ。
こうして歴史は刻まれていくのだ・・・



(共学共高とは：ディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)